

2018年
7月号

“ありのまま”で居れる場所

今回は、長屋をリノベーションし“夢”だったカフェを経営する橋詰さん。建物自体は「店舗付き住宅」として、オーナーとシェアする形態。1階を橋詰さんの店舗、2階をオーナーの住居としています。昼間時間帯にお店を営業することで、夜寝るだけの空間になりがちな家に風を通すことができる。さらに、費用面でも両者にメリットがあると選んだのがこのカタチ。お互いの望みが叶えられた理想的・合理的な選択です。

元々の物件は築50年超えの長屋で、かつて工務店事務所だったもの。台所等の水回りを中心部に移したほかは、入口や窓も原型をほぼそのまま活用していると聞きますが、事務所だった面影は感じません。

店内は、木材の持つ天然の柔らかい質感を存分に活かし、“温もり”が溢れます。木材のダークブラウンを基調に、差し色の赤い小物と味のある骨董が並びます。入ってすぐ出迎える“座敷席”は、カフェというより帰省したような“くつろぎ”があります。



▲ 桃谷駅からすぐの裏道に佇む「和カフェ」。付近は人通りが多いものの、駅前の雑踏とは異なり、ゆっくりとした時間が流れる空間。下町のほのぼのとした空気に溶け込むように橋詰さんのお店はあります。長屋の1階部分を借り受け、カフェとしてはもちろん地域コミュニティの場として利用されています。

「生野区には以前から住んでいましたが、お店を始めて新しい地域で新しい出会いがあった。人情味溢れるところも、下町情緒たっぷりの街並みも素敵」嬉しそうに話してくれる橋詰さんは、お店の切り盛りを一人でこなし、地域活動にも積極的。その活力源は強い思いからのよう。

「カフェという場は、リフレッシュ空間や飲食物の提供だけでなく、地域に貢献できるコミュニケーションスペースであることが重要だと思う。」地域の方と繋がれる、ここに来れば誰かと話ができる、そういう空間を大切にしたい。

私自身が、友達と過ごす時間や楽しい事・綺麗な物に触れる時間で満たされるように、お客さまにも満たされる何かを提供したいと思っています

“誰かに何かを提供したい”そんな優しさが根底にあるからか、橋詰さんの居る空間は、心が安らぎ“ありのまま”で居れる懐かしい場所でした。



2018年
8月号

人の可能性を広げる家

第4回目のお住まいは、事務所兼自宅として長屋をリノベーションされている橋爪さん宅。1階の改築は専門家に依頼しながら、解体作業など出来ることはご自身でされたそう。当時の仕事の関係で引っ越してきた生野区。偶然移り住んだ場所だそうですが、まちの活性に積極的に関わってこられました。“生野区空き家活用プロジェクト”の名付け親で、その一員としてリードしてきた橋爪さん。プロジェクトを前に進めるため、“実験台”として名乗りを上げ、空き家を購入。“第1号”として出来上がったのが現在のご自宅。

お住まいには、玄関と別の場所に設けられたもう一つの入口があります。入るとすぐに土間が広がり、腰かけるのに丁度良い上がり框（かまち）が出迎えます。



▲ 勝山北地区にある橋爪さんのお住まい。裏路地に面したお家は、勝山通りからほど近い場所ですがゆったりとした時間が流れる静かな空間です。

事務所をメインとして、家族・友人が集うプライベート空間、さらには地域活動やワークショップの開催場所、といった具合にさまざまな顔を持ち、多くの人が集うこの場所。

生野区内で“まちのえんがわ”の名で、会社の一角をコミュニケーションスペースとして開放されている先例にならない「“まちのえんがわ”橋爪事務所」と名付けられています。「家に事務所を作って、そこをいろんな顔を持つ場所にする。そんな暮らしがしたいと思っていたので、この場所はお気に入り。」と話す橋爪さん。

「こんな暮らしがしたい」と思ったことが多くの人に助けられて形になり、今の場所ができた。この場所がまた、叶えたい夢のある人を引き寄せ、その人の可能性を広げる場所になっている。」という言葉からは、出会いを大切にする人柄が溢れていました。



2018年
9月号

「好き」と「やさしさ」の家

今回は、前号の「IKUNO×グローバル」にご登場のフェルナンドさんと、大橋さんご夫妻のお住まい。築30年超の長屋をリノベーションし、住居兼アトリエのほか、ワークショップの開催場所としても活用。

画家であるフェルナンドさんのアトリエをつくるために引っ越した今の家は、前の住人により一度改修されていて大掛かりな改修の必要がなく、クロスや張替や傷んだ床・畳の交換程度だったそう。「トイレのレトロなタイルとか、扉に貼られた日焼けしたPTAの標語とか。この建物の歴史が分かるところがオモシロイ。」と教えてくれました。

玄関から奥へと順に部屋が続く長屋らしい間取り。1階奥にあるキッチン・ダイニングは、長屋の角地の特性を活かした並んだ窓による明るさと風通しの良さが魅力。

キッチン・ダイニングの隣につながるアトリエ。床の間がある“和風”の部屋と、黒・赤を基調とした“現代的”なフェルナンドさんの作品という、相反する2つが自然に溶け込み、独創的な雰囲気と温かさを感じます。フェルナンドさんは「ここで絵を描いている時間が一番好き。」なのだとか。



▲ 生野本通り商店街から脇道に進むと見えてくるお住まい。大型店舗が多い大通りの近くにありながら、お住まいの近くは、商店街をはじめとした個人商店が並ぶ懐かしい景色です。



「アトリエに対抗して作った(笑)」と案内されたのは、2階の大橋さんが趣味でされる洋裁の部屋。大胆な壁の柄と配色にまず目を奪われますが、収納用品や雑貨、収集した手芸用品・生地も個性的なものばかり。

訪れた国々で手に入れたものも多いのだとか。各国独自のデザインが調和した多国籍・多文化な空間は、旅に出たようなワクワクが止まらない。

大橋さんは「ダイニングの床で、ゴロゴロするのが好きかも。板の質感が好き。」と笑う。

「あと、ベランダで食事したりする時間も。」とお気に入りのご夫婦で過ごす時間のような。そんな大橋さんをフェルナンドさんは嬉しそうに見守っていました。ご夫婦が暮らす家は、お互いの歴史、好きなもの、時間を大切に、尊重しあう場所。そこには暮らす家の歴史まで楽しめる大人のご夫婦のお互いを思う“やさしさ”が詰まっていました。

